

1

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その日ルーチカは、いままでにきいたことのないような、とてもうつくしい^{ふえ}笛の音で目がさめました。

さいしょのうちルーチカは、自分が夢のなかにいるのだとおもいました。けれど、だんだんあたまのなかのはっきりとしてきたあとも、その笛の音はずっときこえてくるのです。

ルーチカは、まだねむい目をこすりながらベッドからおきると、窓^{まど}のそばにいて外をのぞきました。うつくしいしらべがきこえてくる木のほうへ目をやると、木の葉がかさかさゆれ、枝のあいだにちらちらとみえかくれしているかげがあります。

(だれがふいているのかな……。それにしても、なんてきれいな音色だろう。)

ルーチカは窓^{まど}をあけて、朝の空気をむねいっぱいにするこむと、元気な声でいいました。

「おはよう！ ねえ、きみはだれ？ ともすてきな音楽だね！」

すると、ルーチカの声におどろいたのか、(a) 笛がやんでしまったので、ルーチカはあわててさけびました。

「おーい！ こわがらなくてもだいじょうぶだよ。ぼく、きみともだちになりたいんだ！」

そのとき、さあーつとつよい風が、森のなかをふきぬけました。

「あっ……。」

ルーチカはいつしゅん目をつぶり、それからそっと目をあけました。すると、枝のあいだでゆれていたかげは、もうどこかへきえてしまっていました。

「あーあ、いなくなっちゃった。ぼく、(b) おどかすつもりなんてなかったのになあ。」

ルーチカはほんとうに、ただその笛の主^{ぬし}と、ともだちになりたかっただけでした。けれども、にげられてしまったのではしかたがありません。ルーチカは、笛の主をさがすのをあきらめて、さっそく朝の身じたくをはじめました。

ルーチカはまず、あらいおけに水をくんで、小さな両手でばしゃばしゃと顔をあらい、おひさまのにおいのするふかふかのタオルで、ぽんぽんと水をふきとりました。それから、自分にぴったりの歯ブラシをつかってシャカシャカと歯をみがき、さいごにせなかのはりをきれいにとのえると、かがみのまえでにっこりほえみました。さあ、朝の身じたくがおわったら、つぎは朝ごはんの時間です。ルーチカは、マグカップにあたためたミルクをそそぎ、お皿のうえに野菜のタルトとパンをのせました。それから、りんごジャムを戸だなからだしてくると、テーブルのいすにちょこんとすわって、もぐもぐと朝ごはんをたべはじめました。ガラスびんの底にのこっていた、りんごジャムのさいごのひとすくい^①をパンにぬると、ルーチカは、はなをくんくんさせながら、なんだかそわそわしはじめました。

「家にのこっていたりんごジャムも、これでぜんぶなくなっちゃった。いよいよ、あかすぐりのジャムをつくる 때가やってきたぞ。」

ルーチカは朝ごはんをたべながら、きよねんのことをおもいだしていました。ちょうどきよねんの今ごろ、ルーチカは森のなかで、ルビーのように真っ赤にかがやく、あかすぐりのしげみをみつけたのです。あの日当たりのいい場所なら、きっとたくさんのあかすぐりがみのっているにちがいありません。

「ことしは、あかすぐりのジャムをいっぱいつくって、みんなにもたべさせてあげたいな。そうだ、こんどパーティーをするときに、もって行ってみよう！ みんなによるこんでもらえるといいなあ！」
ルーチカは、みんなのよろこぶ顔をおもいうかべただけで、いてもたってもいられなくなりました。
いそいで朝ごはんをたべおえると、わくわくしながら森へでかけていきました。^②

国語 (二まいめ)

それにしても、きょうはなんて天気の良い日なのでしょう。やわらかな風は、ルーチカのほほをなで、まぶしい日のひかりは、まつげのうえできらきらとかがやいています。ルーチカは、すっかりうれしいきぶんになって、歌をうたいはじめました。

ぼくは ルーチカ はりねずみ

あたまのうえに りんごを のせて

あるいていくよ どこまでも

こまったひとが いたときは

おいしい りんごを あげるんだ

リン ララ ルン ララ ルンラララ

ルーチカが、じょうきげんであるいていると、とつぜん足もとの土が、もくもく、もくもくと、もりあがりはじめました。

「おっととと……。」

土のもりあがりは、右へ左へくねくねとうねり、そのたびにルーチカも、右へ左へじょうずによけてあるいていきます。ルーチカが、七歩めの足をまえにだしたとき、

「やあー ルーチカー！」

いっぴきのもぐらが、土から（c）顔をだしたのです。

「こんにちは、ソル。」

「きみ、ごきげんだねえ。どこへでかけるの？」

「ぼく、これからあかすぐりをとりにいくの。このかごいっぱい、ルビーみたいなあかすぐりの実をあつめて、おいしいジャムをつくるんだ。」

それをきいたソルは、おちつきなく、はなをくんくんさせました。

「あかすぐりのジャムって、どんなあじ？」

A

B

C

ルーチカがちよっとくいげに、おなかをふくらませました。

「それじゃあ、おひさまにあげてはだめだね。だって、そんなことをしたら夜がこなくなるし、そうになったら、おつきさまがかわいそうなもの。」

ソルは、ルビーのようにきれいな実でつくる、あまずっぱいあかすぐりのジャムのことをかんがえただけで、いてもたってもいられなくなり、土のなかからとびだしてきました。ふたりはならんであるきながら、ジャムのはなしをつづけます。

「ところでさ……、あかすぐりあつめをつだったともだちは、それでつくったあまーいジャムをたべることができる？」

「そりゃあもちろん、あかすぐりあつめをてつだったともだちは、それでつくったあまーいジャムをたべることができるよ。」

それをきいたソルはおおよろこびで、うしろちゅうがえりを三回もしました。そのあいだに、ルーチカは三歩まえにすすんでしまったので、ふたりのあいだには六歩も差ができてしまいました。だからルーチカが、

国語 (三まいめ)

「もちろん、あかすぐりあつめをてつたわなかったともだちだって、あかすぐりのジャムを食べることはできるけれどね。」

③ といったのを、すっかりききのがしてしまいました。

「よし、ぼくもはりきって、あかすぐりをあつめるぞ！」

ソルは、元気よくさけびながらルーチカにおいつくと、ふたりでなかよく歌をうたいながら、森のおくへとむかいました。

二人は、ルーチカが知っていた、あかすぐりの実がたくさんとれる場所へ行きましたが、そこにはまだ実がみのっていませんでした。

「ぼくたち、これからどうしようか。あかすぐりの実は、まだみのっていなかったしねえ。」

ソルがざんねんそうに、あたりをみまわします。

「せっかくここまできたんだから、べつの場所をさがしてみよう。」

ルーチカはいいましたが、ほんとうのところ、いったいどこをさがせばいいのか、まったくけんとうがつきませんでした。ゆきあたりばつたり、あかすぐりのしげみをさがすには、森のなかはあまりにひろすぎたからです。

そのとき、どこからともなく、かぐわしい花のかがりがながれてきました。ふたりがうっとり目をつぶると、こんどはそよ風にのって、あのすきとおるような笛のしらべがきこえてきたのです。

「あ、この笛の音は——！」

ルーチカは、はっとしたように顔を上げました。すると、少しさきにある木の枝のうえで、ちらちらと小さなかげが動くのがみえたのです。ルーチカは、あっというまに、そちらへむかってかけだしました。

「おーい、ルーチカ！ どうしたの!？」

ソルはわけのわからないまま、ルーチカをおいかけます。

ルーチカは、笛の音がきこえてくるほうへむかって、いっしょうけんめいはしりました。けれども笛の主は、ルーチカたちがおいつきそうになると、さっとつぎの枝へとびうつり、またやっとおいついたかとおもうと、さらにさきの枝へ、かるやかにとびうつってしまふのです。

とうとう、くたくたになってうごけなくなったふたりは、大きな木のねもとにぺたんとすわりこんでしまいました。ルーチカは、息をきらしながらいいました。

「ねえ……きみ……そろそろ、おいかけてこはやめにして、すがたをみせてよ。ぼく、きみと、ともだちになりたいだけなんだ。」

すると、またやさしい風がふいてきて、ふたりのうしろから、あのうつくしい笛の音色がひびいてきたのです。

ルーチカとソルが、ゆっくりうしろをふりかえると、どうでしょう……。

そこには、まるでルビーのようにかがやくあかすぐりの実が、丘^{おか}いちめんにひろがっているではありませんか。ふたりは、まるで夢のなかにいるようなきもちになって、丘にちりばめられたいくせんものあかすぐりをぼんやりみつめていると、やがてふしぎな笛の音はだんだんとおくなり、しまいにふっときえてしまいました。

(かんのゆうこ『はりねずみのルーチカ』より)

国語 (四まいめ)

(注) しらべ……………音楽のこと。

あかすぐり……………赤い小さな果実の一種。

みずみずしい……………新鮮なこと。

ゆきあたりばったり……………特に考えもなく適当にすること。

かぐわしい……………においがよいこと。

(1) ①の文章中の(a)と(c)に入ることばの組み合わせとしてよいと思われるものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|-------|
| ア | a | ひよっこり | b | さっぱり | c | ちつとも |
| イ | a | ひよっこり | b | びたりと | c | ぽっかり |
| ウ | a | びたりと | b | ちつとも | c | ひよっこり |
| エ | a | すつと | b | ひよっこり | c | びたりと |

(2) ①の文章中のAとCに入る会話文としてよいものを、次のア～ウから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 「それって、どれくらいおいしいの？」
- イ 「あまくて、ちよつとすっぱくて、とってもみずみずしいあじがするよ。」
- ウ 「そうだなあ。もしおひさまが、ゆうがたにそれをたべたら、あんまりおいしくて、しずむのをわすれてしまうくらいおいしいよ。」

(3) ①の文章中に——線部①「なんだかそわそわしはじめました。」とありますが、その時のルーチカの気持ちにもっとも近いものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かなしく思っている気持ち イ 楽しみにしている気持ち
- ウ 不思議に思っている気持ち エ いらいらしている気持ち

(4) ①の文章中に——線部②「わくわくしながら」とありますが、その理由としてよいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 朝ごはんの時に、またりんごジャムをたくさん食べられるから。
- イ もぐらのソルと待ち合わせて行くのがとても楽しみだったから。
- ウ あたまのうえにのせたりんごをだれにたべさせてあげようかと考えていたから。
- エ みんなにたべさせてあげてよろこぶ顔をおもいうかべたから。

(5) ①の文章中に——線部③「よし、ぼくもはりきって、あかすぐりをあつめるぞ!」とありますが、はりきろうと思った理由を五十字以上六十字以内の一文でぬきだし、最初の五字を答えなさい。(句読点と記号も一字と数えます。)

(6) ①の文章中に——線部④「はっとしたように顔を上げました。」とありますが、その理由としてよいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 朝おきるときにきいたうつくしい笛の音と同じだったから。
- イ あかすぐりの実のある場所を教えてくれる笛の音だったから。
- ウ 追いかけてこをはじめる合図だと思ったから。
- エ 木の枝の上で小さなかげが動くのがみえたから。

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

植物たちは、光合成という反応をすることで、エネルギーの源となる物質を自分でつくります。ですから、食べ物を探し求めて動きまわる必要があります。しかし、もしタネが光合成のできない「場所」や「季節」に発芽してしまったら、^①発芽したばかりの芽生えは、光合成をしてエネルギーの源となる物質をつくることができないので、枯死します。

植物たちが食べ物を求めて動きまわらなくてもよいのは、芽生えが光合成をできるように、タネが「場所」と「季節」を選んで発芽するからです。そのために、タネは発芽する「場所」と「季節」を知るためのしくみを身につけていなければなりません。

春になると、多くの種類の植物たちのタネが発芽します。野やあぜ道に、多種多様な雑草が芽を出してきます。だから、「冬の間、寒くて発芽できなかったタネが、春になって温度が高くなり、暖かい陽気に誘われて発芽してきた」との印象を受けます。□、タネの発芽は、「暖かくなればおこる」という、気楽なものではありません。

タネが発芽するために、大切な条件が三つあります。「発芽の三条件」といわれるものです。春に暖かくなつて発芽してくる植物のタネは、冬の寒さの中に置かれていて、いつまでも発芽しません。また、暖かい部屋で発芽させることができるタネでも、冷蔵庫のような低い温度の中では、発芽させることはできません。ですから、発芽のために必要な条件の一つは、「適切な温度」であることは、よく理解されます。

二つ目の発芽の条件は、「水」です。タネは、花が咲いたあとにつくられるのですが、成熟するにつれて、乾燥した状態になります。だから、きちんと結実した多くの植物のタネは、乾燥しています。乾燥したタネは、そのままでは発芽せず、水を吸収しなければなりません。ですから、タネが発芽するためには、水が与えられなければなりません。

三つ目の条件は、「空気」です。タネが発芽するには、空気が必要です。なぜなら、タネは私たちと同じように呼吸をしているからです。呼吸にほんとうに必要なのは、空気の中に含まれる酸素です。ですから、発芽の条件として、「空気」と書かれることもありますが、「空気（酸素）」と記述されることもあります。

小学校で発芽の三条件とは「適切な温度、水、空気（酸素）」と教えられます。理科の教科書には、これを確認するための発芽の実験が紹介されています。ダイズやインゲンマメなどを使って、この三つの条件のどれか一つが欠けても、発芽がおこらないことが示され、三つの条件がととのえば、実際にタネが発芽することが確認されています。

そのため、「適度に暖かく、発芽に使える水があり、呼吸もできるという条件がそろえば、多くの植物のタネは発芽する」と思われがちです。しかし、実際には、そうではありません。多くの植物のタネは、発芽の三条件がそろったからといって、簡単には発芽しないのです。

発芽後の芽生えは、しばらくの間、タネの中に貯蔵されていた養分に依存して成長できます。しかし、その後、芽生えは光合成をして、ブドウ糖やデンプンをつくらねばなりません。発芽した芽生えは、「光が当たらないから」といって、光の当たる場所へ移動することはできません。もしそのまま光に出会えなければ、光合成ができず、自分で栄養分をつくり出すことができません。その芽生えは、やがて枯れてしまいます。

そのため、多くのタネは、発芽の三条件がそろっているだけでなく、光の当たる場所を選んで発芽します。小学校の理科の教科書で発芽の実験に使われるダイズやインゲンマメなどのように、人間に栽培される植物は、真っ暗の中で発芽してもいいかもしれません。そのまま枯れてしまうと困る人たちが、光の当たる場所に移動させてくれるからです。

ところが、自然の中を自分で生きていかねばならない植物は、発芽の三条件以外に、発芽後も成長できるかどうかを見きわめねばなりません。少なくとも、光が当たっているかいないかを、発芽の際に自分で見きわめる必要があります。そのためには、光を感じる物質を身につけていなければなりません。

私たち人間は、目の中に、光を感じる「ロドプシン」という物質を持っています。私たちはこの物質で、光が当たっている明るい場所であるかどうかを認識できます。

植物のタネも、光が当たっているのかいないのかを感じるための物質を持っています。「フィトクロム」とよばれる物質です。植物たちのタネは、この物質で自分に光が当たっている明るい場所であるかどうかを見きわめるのです。

フィトクロムが光を感じると、発芽が促されます。多くの植物のタネは、フィトクロムをもっており、「光が当たらないと発芽せず、光が当たると発芽する」という用心深い性質を身につけています。植物たちは、発芽の三条件がそろった上で、さらに、光合成ができる場所であるかを確認して発芽するという、「石橋をたたいて渡る」ような慎重な性質を身につけているのです。

発芽の三条件とは「適切な温度、水、空気（酸素）」です。これらの三条件をとのえ、さらに光が当たるようにすれば、多くの植物のタネは発芽するでしょう。実は、それでも発芽しない植物のタネは多くあります。「石橋をたたいても渡らない」という慎重さを身につけたタネです。秋に結実する植物たちのタネが、この性質をもっています。

発芽の三条件も光もあるのに、「何が不満で発芽してこないのか」と不思議に思われるかもしれませんが、理由は明白です。秋に発芽すれば、すぐにやってくる冬の寒さで枯れてしまうからです。秋に結実する植物たちのタネは、冬の寒さが通過したあとでなければ、発芽しないのです。

タネは、冬の通過を確認するために、寒さを感じます。自然の中で春に発芽するタネは、冬の間に寒さに耐えているだけのように思えます。でも、これらのタネは寒さにただ耐えているだけではないのです。土の中で寒さを体感し、冬の通過を確認しつつ、発芽の準備を進めているのです。

(田中 修『植物のあっぱれな生き方 生を全うする驚異のしくみ』より)

(注) 光合成……………光を用いて、吸収した二酸化炭素と水分からデンプンや糖などのエネルギーを合成すること。

エネルギーの源となる物質……………エネルギーのもととなるもの。

発芽した芽生え……………種からではじめたときの芽のこと。

枯死……………草や木が枯れ果てること。

あぜ道……………田んぼの間の細い道。

成熟……………穀物や果物などが十分にみのること。

結実……………草木が果実をつけること。

発芽が促され……………発芽しやすいようにすること。

明白……………あきらか。

国語 (七まいめ)

(1) ②の文章中の□の中に入れるとよいと思われるものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それとも イ すると ウ しかし エ そのため

(2) 次の文章は②の本文からぬきだしたものです。この文章は、本文中の(ア)～(エ)のどこに入りますか。よいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

なぜなら、発芽の三条件の中には、「光が当たること」という条件が入っていないからです。もし、光の当たらない場所でタネが発芽すれば、発芽した芽生えがどんな運命をたどるかは、容易に想像がつきます。

(3) ②の文章中に――線部①「発芽したばかりの芽生えは、光合成をしてエネルギーの源となる物質をつくることができないので、枯死します。」とありますが、枯死しないためにタネはどのような工夫くふうをしていますか。その工夫が書かれている部分を「という工夫。」に続く形で、二十字でぬきだして答えなさい。
(句読点と記号も一字と数えます。)

(4) ②の文章中に――線部②「これらの三条件をととのえ、さらに光が当たるようにすれば、多くの植物のタネは発芽するでしょうか。実は、それでも発芽しない植物のタネは多くあります。」とあります。これについて説明した次の文章の() に入れるとよいと思われる、四字のこばを本文中からぬきだして答えなさい。
(句読点と記号も一字と数えます。)

〈説明の文〉

秋に結実する植物たちのタネは、() が通過したあとでなければ発芽しない。

(5) ②の文章全体を通してのべられている内容として、よいと思われるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 植物たちは、エネルギーの源となる物質を自分で作り出すことができない。
イ タネは「発芽の三条件」がととのうことで、かならず発芽する。
ウ 発芽後の芽生えは、しばらく、タネの中の養分に依存して成長する。
エ 植物のタネは、光を感じる「ロドプシン」とよばれる物質を持っている。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まだ真っ暗なうちに目が覚めてしまった。布団ふとんから抜け出して、木造の窓まどの隙間すきまから外をのぞいても、太陽の気配は感じられなかった。

① 部屋のなかも真っ暗で、時計がどこにあるか見つけられない。いったい何時くらいなんだろう。夜明け前の空気は、音という音を鮮あざやかに伝えてくれる。鶏にわとりの鳴く声が、近くから遠くから聞こえてきた。離れはなにある台所から、部屋を力ちからしてくれた家の奥さんのだと思う、足音がパタパタと響ひびいてくる。

「布団がない可能性もある」と聞いて、寒いのは覚悟かくごして日本から寝袋ねぶくろを持ってきたが、村びと

国語 (八まいめ)

が用意してくれた新品の毛布のおかげで、思ったよりも暖かい夜を過ごせた。けれど意識が興奮していたのか、時差の影響なのか、夜なかに何度も目が覚めてしまった。

もう一度眠りなおそうと布団に潜り込んでも、眠れそうな感じがまったくしない。火の爆ぜる音や鍋と鍋のぶつかる音を聞いていると、いてもたってもいられなくなり、靴を履いて階下に下りることにした。

階段を下りると、火にかけられた鍋から勢いよく蒸気があがっていた。家の奥さんはわたしに気がつくのと、たらいをひとつ持ってきて、鍋の熱湯と水を混ぜて差し出してくれた。顔や手を洗ってください、ということだと思う。

アウトドア用の厚手のジャンパーに身を包み、首にはストールをぐるぐると巻きつける。靴下もスパッツも何枚も重ねばきして、寒さ対策は万全だった。とはいえ、吐く息も白く染まるヒマラヤの朝は、沖縄で暮らしているわたしには骨身にしみる寒さだ。火の前に置かれた木のベンチに腰掛け、たらいの中に手を入れると、湯の温かさがじんわりと全身に伝わってきた。顔を洗うと、頬の筋肉が緩んでくるのがわかった。

家の旦那さんが、温かいバター茶を持ってきてくれた。ブータンでは、紅茶のようなお茶のなかに、塩やバターを入れたバター茶がよく飲まれている。このバター茶は、見た目はミルクティに似ているが、味はスープに近い。他国から来たひとは苦手とするひとも多いそうだが、「茶」という先入観を持たずに飲むと結構いける。

バター茶をいただきながら、鍋にかけられた火をずうっと眺めていた。燃えている薪が短くなってくると、台所の建物の横から新しい薪を持ってきて、火の上に置いた。しばらくすると薪に火が燃えうつり、パチパチと爆ぜる音が加速する。鍋のまわりは明るくなり、冷たい空気が暖まった。

火はいいなあ。手のひらを火にかざしていると、こころの底からそう思った。

火の温度を肌で感じ、火の色を眺めていると、余計な思考が消えていった。思考が消えるほど、こころは穏やかな気持ちになっていく。

穏やかな気持ちになると、普段どれだけ思考を動かしながら過ごしていたかがよくわかった。そして、電気やガスを使って、らくに水を熱湯に変えることができるようになったぶん、思考を止める間を失っていたことに気がついた。火は底なしにこころを癒してくれるのに対して、思考は人間をとても疲れさせる。思考を止める、『炎マジック』。これなくして暮らしていくことは、じつはわたしたちが思っている以上に過酷なことなのかもしれない。

昨日、辻さん（同行者）がヨモギの残り火を燃やしながら、「人間は、火から生まれた」と言っていた。その言葉を思い出しながら、太古の人びとがどんな気持ちで火を眺めていたか、同じように火を眺めながら想像してみようと思った。けれど、すぐに瞼を閉じてしまった。現代文明にどっぷりつかっていないわたしには、いくら想像してもはかり知れないような気がした。

空を見上げると、山の後ろはうっすらと白みはじめ、星は目に見えなくなりそうなほど小さくなっている。

遠くで鳴く鶏の声に力が増した。もうすぐ、チモン村に夜明けがやってくる。

空が明るくなると、村びとたちが水汲み場に集まってきた。わたしが泊まった家と台所の建物のちようど間くらいのところにある、山から引っぱってきた長いホースが大きなタンクの上に置かれただけの水道だ。

奥さんは、タンクのところで鶏や牛たちの餌のジュンビをすませると、大きな鍋を洗った。バター

国語 (九まいめ)

茶を持ってきてくれただんなさんは、小学1年生になる息子とタンクの横で何か話し込んでいます。

あるおじさんは、タンクの近くに腰を下ろすと、長い刃物を真剣な表情で研ぎはじめた。細い小径を歩いてきた白髪のおばあちゃんは、持ってきたふたつのボトルに水を汲んだ。ひとつずつ持ち帰ろうとするので、わたしがもうひとつのボトルを持って追いかけていくと、おばあちゃんは顔中くしゃくしゃにシワをよせて喜んでくれた。

水道はいくつかの家と共同で使っているようだった。こういうコミュニティの暮らしを経験したことのないわたしだけれど、タンクのある場所へ誰かが水を求めてやってくる風景に、なぜか懐かしい気持ちになった。

(かわしまよう子『ブータンが教えてくれたこと』より)

(注) 爆ぜる……………細くなつて飛び散ること。

たらい……………水を入れて顔や手足を洗う、洗面器より大型の容器。

ブータン……………ヒマラヤ山脈東部にある国。

先入観……………前もってもっている考え方やものの見方のこと。

過酷……………きびしすぎること。

太古……………非常に遠い昔。

チモン村……………ブータンにある村。筆者は本文中、そこに来ている。

コミュニティ……………それぞれの町や村など、いっしょに生活する集団のこと。

(1) ③の文章中に——線部①「夜明け前の空気は、音という音を鮮やかに伝えてくれる。」とありますが、この表現は「夜明け前」のどのようなうすを示していますか。次のア～エの中からよいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア しんとした霧囲気の中、小さな音までもはっきり聞こえるようす。

イ そうぞうしい霧囲気の中、大きな音がひびきわたっているようす。

ウ 明るい日の光の中で、音同士が美しくひびきあっているようす。

エ 真つ暗な中で、かすかな音がとぎれとぎれに聞こえるようす。

(2) ③の文章中に——線部②「靴を履いて階下に下りることにした。」とありますが、「わたし」がそうしようとしたのはなぜですか。次のア～エの中からよいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太陽の気配で目が覚めてしまい、まぶしくてもう眠れないと思ったから。

イ まだ部屋のなかが真つ暗なことが、不安でたまらなかったから。

ウ 寝袋しかなかったため、眠るには寒くてたまらなかったから。

エ 人の活動する音が聞こえてきて、じっとしていられなかったから。

(3) ③の文章中の——線部A「家の奥さんはわたしに気がつく、たらいをひとつ持ってきて、鍋の熱湯と水を混ぜて差し出してくれた。」と、——線部B「家のだんなさんが、温かいバター茶を持ってきてくれた」とありますが、家の人びとのこれらの行動から、「わたし」はどのような気持ちになっていると考えられますか。よいと思われるものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア からかわれている気持ち

イ もてなされている気持ち

ウ おそれられている気持ち

エ 反発されている気持ち

- (4) ③の文章中の——線部③「炎マジック」とありますが、これについて説明した次の文を読み、
() にあてはまる語句を本文中から五字でぬきだして答えなさい。ただし、句読点や記号はふくまないものとします。

説明

「わたし」の述べる『炎マジック』は、「わたし」自身が体験した、火を見ていると()
が消えて、こころが穏やかな気持ちになっていくというようすをさす言葉である。

- (5) ③の文章全体を通して述べられている内容として、よいと思われるものを次のア～オの中から
すべて選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は、客に貸す布団もないようなチモン村の貧しい暮らしをあわれんでいる。
イ 先入観を持ってバター茶を苦手とする人に、「わたし」は自分も同じだと共感している。
ウ 現代文明の中で生活する「わたし」は、太古の人びとの気持ちかはかり知れないでいる。
エ 「わたし」は、チモン村の水汲み場での日常生活を見て、懐かしい気持ちを感じている。
オ チモン村での生活を通して、「わたし」は村や住人にいらいらした感情を持っている。

- (6) ③の文章中の——線部 a 「カ」、 b 「ジュンビ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

国語

受験番号

(注 ※のついたカッコの中には何も記入しない)

1

(1)

(2)

A

B

C

(3)

(4)

(5)

(6)

(※) (※)

2

(1)

(2)

(3)

という工夫。

(4)

(5)

(※) (※)

3

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(5)

(※) (※)

(6)

a

して

b

ジュンビ